

シンポジウム報告

『恋愛と結婚からみる日本文化と現代社会
——人口減少社会にいかに向きあうか』

森 久 聡

去る5月21日（日）13時00分～16時30分、本学B517教室にて、現代社会学部3専攻開設記念公開講座『恋愛と結婚からみる日本文化と現代社会——人口減少社会にいかに向きあうか』が開催されました。本学の1回生のような若い女性から年配の方まで、およそ100の方に参加していただくことができました。近年、「恋活・婚活」や「草食系男子」といった言葉を良く見聞きすると思います。また、恋人がいない若者の割合が過去最大の割合に達しているという調査結果が発表され、大きな話題になりました。このような言葉が流行したり、調査結果のニュースが大きな話題になるということは、人口減少社会を迎えた現代社会の行く末に対し、多くの方が危機感を抱いていることを表しているといえるでしょう。そこで、現代社会学部ならではの視点から、現代の恋愛・結婚事情について考えるべく、このシンポジウム形式の公開講座は開催されました。

第一講演では、井上章一先生（国際日本文化研究センター教授）より「ブラジルの草食系男子」というタイトルで講演をしていただきました。井上先生は建築史・日本文化論が専門で、京都人の気風をウィットに富んだ筆致で描写してベストセラーになった『京都ざらい』（朝日新書）の著者です。また『京都ざらい』の続編と言える『京女の嘘』（PHP新書）も出版されました。そこで井上先生には、現代日本の若者の恋愛事情を日本文化論の視点から解釈していただきました。日本文化および現



写真1 会場の様子



写真2 講演に耳を傾ける参加者

代日本との比較対象として、かつてブラジルに長期滞在した期間にご自身で見聞きしたブラジルの恋愛事情だけではなく、フランスの話など国際的な恋愛事情を踏まえることで、日本文化における恋愛事情や現代日本の若者たちの特質が浮かび上がってきま

した。

現在、私たちは若者たちを恋愛に臆病だとか、結婚願望が少ないとして、そうした気風の若者男子を「草食系男子」と呼んだりしています。しかし、井上先生によると、元来日本男子は奥手であったといえます。男性が色気を感じる女性のパーツとして昔から「うなじ」や「足首」などが挙げられますが、これらは女性の背後からこっそりと見ることできるパーツであり、女性を真っ正面から見つめることができない男性の奥手な性質を現しているのだと井上先生は解釈しています。このように奥手な日本男子はどのように結婚しているのでしょうか。それは、日本では結婚することを前提にした社会制度が多く存在しており、親戚や会社や地域社会など様々な場面で結婚相手を探してくれる人が存在していたため、たとえ恋愛下手でもいずれ誰かと結婚できたのだそうです。そして現代日本の若者は「草食化」したのではなく、もともと草食系だったのではないかという見解を話されました。

第二講演では、本学客員教授の橘木俊詔先生より「肉食女子・草食男子の意味」というタイトルで講演いただきました。橘木先生は、労働経済学の視点から格差社会について数多くの著書を出版されています。そして新聞などのマスメディアを通じて現代の格差問題の1つの側面として恋愛事情や結婚についても持論を発信されています。そこで橘木先生には、現代社会はどのような存在として「草食男子」

と呼ばれる人々を捉えているのかということ政府機関やシンクタンク、マスコミが実施した統計的な情報をもとに講演して下さいました。

そして一口に「草食男子」といっても、次の2種類が存在しているという見解を示されました。1つは、会社で出世したり、高い地位を獲得すること、あるいは高い収入を得るといったものを懸命に目指すのではない生き方や仕事の取り組み方を選択する男子という意味での「草食男子」というものです。もう一つは、女性との恋愛関係を構築したり、結婚願望が弱かったり、願望を持たないといったタイプの「草食男子」です。橘木先生によると、この2つの「草食系男子」が混在して認識されていたり、話題にしているということを明らかにされました。

第三講演では、本学社会学部教授の西尾久美子先生より「伝統文化の担い手『舞妓さん』の当世事情」について講演していただきました。西尾先生は経営学の視点から芸舞妓さんや宝塚歌劇団などを研究対象に、どのように若手を育てて伝統文化や劇団の担い手を生み出していくかという人材育成について研究を重ねている方です。今回の講演では、芸舞妓さんという特殊な職業に就く女性がどのように恋愛や結婚を経た人生を送るのか、芸舞妓や宝塚歌劇団を事例に女性のキャリア形成と人材育成について経営学的な研究を続けてこられた西尾先生ならではの視点と丹念なフィールドワークに基づいた貴重な資料をもとに論じていただきました。西尾先生の講



写真3 井上章一先生の講演



写真4 橘木俊詔先生の講演

演では、舞妓さんのお座敷デビューまでの稽古や作法の躰だけではなく、デビュー当日の髪結いなど色々な形で多くの人が舞妓さんのデビューをサポートしていることが分かりました。そして、デビューの後も置屋さん、先輩芸者、時にはタクシー運転手まで様々な立場の人が次世代の芸舞妓を育成していることが紹介され、それらが地域経済の仕組みとして確立されている様子が理解できました。

いずれの話もとても興味深く聞かせていただきましたが、いずれの講演も共通しているのは、私たちは個人個人独立して生きているのではなく、社会的なサポートに支えられて生きている存在であるということがとくに印象に残っています。

たとえば、第一講演の井上先生のお話では、恋愛や結婚の世話をすることが社会的なサポートとして必要なものとみなされていた時代から、現代ではそういったものが「余計なおせっかい」であるとか、個人のプライバシーへの介入であるとか、ときにセクハラとみなされる時代に変化してきたことを読み解くことができると思います。つまり、社会的なサポートとして恋愛や結婚の世話を受けることがなくなってきたために、奥手の若者は結婚する機会に恵まれなくなってきたのではないかというわけです。かつて、どの地域にも色々な男女を結びつけてきた「おせっかいな」人がいるものでしたが、今はそうした人がめっきり少なくなったことを思い起こせば



写真5 西尾久美子先生の講演

納得できると思います。

また第二講演の橋木先生の話からは、現在のよう「草食男子」が社会的な関心と呼ぶこと自体が、恋愛と結婚が社会的な関心と呼ぶもの、つまり「個人の事柄」では済まされない話題だと意識されてきていることを示していたように思います。一見すると恋愛や結婚は個人的な事柄であるように思いますが、そうではなく、家族・親族ネットワークや地域社会においても何か意味のある社会的な事柄であるのかもしれない。

同じく第三講演の西尾先生のお話の芸舞妓さんのキャリア形成・人材育成という側面で、多くの人に関わっていて、それが地域経済の仕組みとしても成り立っているところは、まさに社会的なサポートそのものであると思います。

少し話はそれますが、筆者は瀬戸内海沿岸の漁村に伝統的に存在していた若者宿・若衆宿の研究をしています。若者宿とは、村の若者が成人する前に集団生活を営むための家屋です。若者宿を持つ村では、一定の年齢に達した同世代の男子が集団生活して、そのなかで世話役の先輩たちから集団漁法の訓練だけではなく、地域社会での青年世代の役割、祭礼行事の仕事など村での社会生活に必要なことを教えてもらいます。これらが意味しているのは、現在のよう学校教育制度が整備される前の地域社会では、地域社会が総ぐるみで教育する社会的な仕組みが成立していたということです。西尾先生が紹介していただいた芸舞妓さんの人材育成の地域経済の仕組みと重なるところがあるのではないのでしょうか。

このように3人の講演から見えてきたことは、「草食男子」や未婚の若者が増えていくことが大きな社会的関心と呼ぶのは、「最近の若者は消極的だ」とか「自分の幸せだけを考えてワガママだ」という問題意識ではないのかもしれない。もしかしたら、ひとりの若者が大人になり、誰かと出会って家庭を築き、子どもを育てていく…といったプロセスを支えてきた社会的なサポートの力が弱まっていること

を無意識のうちに感じとり、それが「草食男子」や未婚者の増加の現象に対して危機感を呼び起こしているのではないのでしょうか。

以上の講演を踏まえると、若者たちの恋愛・結婚問題は社会的な問題であることも見えてきたと思います。井上先生が述べていたように、元来、日本の若者が草食系だったとすると、様々な形で若者たちの恋愛・結婚事情をサポートしていく必要があります。たとえば、橘木先生は、恋愛・結婚のサポートに対するニーズがあれば、現在の結婚相談所のような恋愛・結婚をサポートする業種がますます発展し、かつての「おせっかいな」人の役割を代替していくと質疑応答のなかで答えていました。また西尾先生の講演と重ね合わせることで見えてくるのは、教育の場は学校教育だけではないということではないのでしょうか。恋愛・結婚とは、若者が社会を支える成員として成長していく過程であり、周囲からのサポートと教育が必要なのです。若者が結婚し新しい家族を形成していく社会的な段階をあげるプロセスは、ある意味、若者のキャリアの形成であり、若者を恋愛・結婚をサポートすることは社会の人材育成ではないのでしょうか。多くの人が芸舞妓さんを支え育てる仕組みは、地域に根ざした人材育成の教育システムと捉えることもできます。恋愛・結婚サポート業の発展といった経済的な対策だけではなく、こうした長年にわたって地域社会を支える人材を育成して

きた仕組みをあらためて見直すことも必要なのかも知れません。

今後、ますます少子高齢化は進み、恋愛と結婚はさらに重要な社会的な課題になることでしょう。そうした将来を見据え、京都女子大学現代社会学部ならではの視点から、現代の恋愛・結婚事情についてマジメに柔らかく考えることができたと思います。最後に、この公開講座で講演を引き受けていただいた3人の先生をはじめ、公開講座に参加して熱心に話を聞いて下さった皆様に感謝申し上げます。



写真6 登壇者の先生との総合討論の様子